

第 40 回 甲南英文学会研究発表会・講演会レジュメ

場所：甲南大学 2 号館 223 教室

研究発表 14:20~16:00

〔 英米文学・文化部門 〕

司会：岩井学（甲南大学）

1. ロアルド・ダールの作品からみる大人と子どもの関係

山並華奈江（甲南大学）

本発表では世界中で人気を博するイギリス作家ロアルド・ダール(Roald Dahl)の作品取り上げる。その中で大人と子供の関係に着目し、ダール自身の経験が反映している部分、またダールの無意識で描かれた主人公の内面について論じていく。

ダールは 1942 年から享年の 1990 年まで作家活動を続けたが、その子ども向けの作品の多くには、主人公が少年少女となり、それに敵対する相手として大人が登場する。取り扱う作品は、いずれも、子どもを軽蔑する大人と主人公との関係がより明確に分かる、1961 年出版『おばけ桃が行く』(*James and the Giant Peach*)、1975 年出版『ダニーは世界チャンピオン』(*Danny the Champion of the World*)、1988 年出版『マチルダは小さな大天才』(*Matilda*)の 3 つの物語である。

まず、ダールの少年時代、作家人生で出会った大人がどれくらい作中の登場人物の造形に影響していたのかを論じる。その中で特に学校生活で出会った虐待をする教師、さらにダールの作品を非難する大人たちの行いが敵役に回る大人に投影されていることが分かる。ダールは 1943 年に最初の子供向けの作品『グレムリン』(*The Gremlins*)を出版し、2 年後の 1945 年に短編集として『飛行士たちの話』(*Over to You*)が出版される。そして、1953 年に 3 作品目の『あなたに似た人』(*Someone Like You*)を出版し、翌年にこの作品でエドガー・アラン・ポー賞(短編小説)を受賞する。ダールが執筆した大人向きの作品が初めて出版して評価されるまで 10 年かかった。それに対し、大人向けの小説で評価されたのち描いた子供向けの作品では、初出版してから世間から評価されるまで約 20 年と 2 倍の歳月がかかっている。さらに『おばけ桃が行く』が出版された際に、1974 年に「ホーンブック」の編集長になる児童図書館員のエセル・L・ハインツがこの本の不買を勧めた。その後の作品でも批評家たちから子どもへの悪影響を懸念する声が挙げられる。作中で大人たちが主人公を虐げる場面は、彼の非難された経験が基盤になっていると考えられる。それに対し主人公の子供たちはどう描かれているのか。現実では大人からの虐待や批判から逃れられなかった

ダールは、作中で主人公が反抗して大人に歯向かう場面を描いている。この事から大人に対して抱く嫌悪感や反感を浄化しようとするカタルシス効果を得て自我の回復を図っていることが分かる。

この様にダールの少年時代及び作家人生の経験を踏まえて作品を生み出していることは明白だが、それだけに留まらず、作者が意図せずに描いている部分についても着目してみる。そこから善の象徴としての主人公の内部にさえ悪の部分が見られるのではないかという事について論じていきたい。

[英語学部門]

司会：アンドリュー・マーティン（甲南大学）

2. Lexically driven pragmatics of *-te oku* in Japanese

中谷健太郎（甲南大学）

Japanese has a rich variety of linguistic expressions that convey pragmatic meanings, such as complex predicates and auxiliary verbs, which have been well documented in the field of traditional Japanese linguistics. However, not many studies seem to have examined *how* the “extra-linguistic” meanings of these expressions are made available—specifically, which morphemes are responsible for the emergence of the apparently pragmatic meanings, what kind of mechanism of pragmatic inference brings them to light, and to what extent they are lexical meanings and to what extent they are derived from pragmatic inferences. As discussed by Nakatani (to appear), what are lacking in these traditional analyses are (i) formal analyses making use of logical terms and (ii) consideration on the compositionality at the sub-word, morphological level. The present study will focus on the auxiliary verb expression *-te oku* in Japanese and examine the extent to which a formal analysis based on compositionality can explain their pragmatic readings. In this process, the boundary between lexical and pragmatic meaning will be carefully examined.

講演会 16:20-17:30 2号館 223 教室

司会：大谷祐二（甲南大学）

眼差しの交差、非交差 — ジョン・スローンと清水登之の都市表現をめぐって

山田隆行（福岡市美術館学芸員）

[要旨]

アメリカ人画家のジョン・スローン（1871-1951年）は、ニューヨークの都市生活を迫真的に描き出したアッシュキャン・スクールの代表的作家として知られる。一方で彼は、教師としての評価も高く、のちにアメリカ美術史を牽引していく多くの芸術家たちを指導した。その教え子の一人に邦人画家の清水登之（1887-1945年）がいる。齢二十で米国に渡った清水は、1917年までをアメリカの西海岸で過ごし、その後、アメリカ美術界の中心であるニューヨークに移住した。同地では美術学校のアート・ステューデントズ・リーグでスローンの指導を受け、同じくニューヨークの生活を主題とする作品を描いた。

本発表の目的は、眼差しという観点から両者の都市表現を捉えなおすことである。アメリカ社会、アメリカ美術界の中心で活躍したスローンと、その周縁に生きた邦人画家である清水の眼差しは、それぞれどのようなものであったのか。その特徴、および類似と差異を手がかりに作品の分析を進めたい。

先行研究においても、スローンを含むアッシュキャン・スクールの都市表象や、清水を含む在米邦人美術の分析は試みられてきた。しかしながら両者は別個に論じられる傾向にある。これは、アメリカ美術史の主流に位置付けられてきた前者と、その文脈に含まれることがほとんどない後者という違いに由来すると考えられる。本発表で試みるのは、先行研究を参照しつつも、改めて両者の画業を交差させ、その特徴を明らかにすることである。

発表の構成は次の通りである。まず、スローンの略歴を紹介し、その都市表現の特徴を明らかにする。ここでは主にスローンが白人男性という、アメリカ社会での特権的な存在として、目の前の情景を一方向的に覗き見る点に着目したい。次に、清水の略歴と、彼がスローンから学んだこと、および当時のアメリカ美術界での受容に言及する。スローンと同様に、清水もまた身近な都市生活を主題とした。しかし、清水は都市生活を見つめる主体であると同時に、在米邦人という不安定な社会的立場にある、常に見られる他者でもあった。スローンの一方向的な眼差しと、それに対する清水の浮遊的な立場、この立場に由来する交差的な眼差しという観点から、発表の後半では、清水の代表作である《ヨコハマナイト》と《夜のチャイナタウン、ニューヨーク》を中心に作品の分析を進める。

分析にあたっては、研究機関や美術館が保管する手紙や写真、作家の手記、新聞雑誌記事といった一次資料も手がかりとしている。また、本研究は清水の日記に関する最新の研究成果も反映している。本研究を起点に、周縁としての在米邦人美術の歴史をアメリカ美術史の文脈に位置付け、新たな視座でアメリカ美術史をとらえなおすことへと繋げたい。

<講演者略歴>

福岡市美術館学芸員。早稲田大学大学院文学研究科修士課程美術史学コース修了、ニューヨーク市立大学シティカレッジ校修士課程美術史コース修了。千葉県立美術館、京都市京セラ美術館事業企画推進室を経て、現職。専門はアメリカ近現代美術史。近年は特に戦間期の在米邦人美術家に焦点を当てた研究を進めている。また、学芸員／キュレーターとして、現代美術展の企画、実施、運営も行う。